

長崎通信

no.

73

●発行 長崎の証言の会 ●事務局 〒852 長崎市宝楽町18-4 ☎0958(62)8725

1984

8・1

うつつと美しい梅雨のあとに、こ
としも炎熱の八月がやってくる。
昨秋の大韓航空機撃墜事件いら
い、内外の緊張はかつてなく高ま
り、「核戦争三分前」という危機
的状況がつづいている。
ヨーロッパへのパッシングII核
ミサイルの配備につづいて、米太
平洋艦隊への核巡航ミサイル・ト
マホークの実戦配備が始まり、日
本と朝鮮半島はいまや世界の核火
薬庫と化しつつある。
この深まる危機の中で、日本の
原水禁運動もいまだ重大な試験の
きをむかえている。問題は原水禁
世界大会にむけて開始される平和
大行進での「団体旗自粛」の合意
から発したが、その根は深い。
一時は原水禁運動の再分裂、統
一世界大会開催不能の事態さえ予
想された。だが、分裂をうける
世論と当事者たちの良識によって、
その危機は回避された。
これらの経過、その要因と今後
の課題等については、内田伯副会
長がレポートしているの、これ
以上はふれない。ただ、日本の反

原水禁運動と証言の会

— ヒロシマ・ナガサキ40年を前に —



核運動、平和運動の一翼をになう
草の根市民運動の一員として、私
たちもこの問題をさけて通ること
はできない。そこで、以下、証言
の会の立場からこの問題を考え、
今後の原水禁運動、証言運動のあ
り方と課題を考えてみたい。
長崎の被爆証言は、被爆直後か
ら記録され、何回か運動としての
高揚もあったが、反核証言運動と
しての意識的な市民運動が開始さ
れたのは一九六八年からである。
その主な動機は、「原水禁運動
分裂のもとに進行する被爆体験の
風化を阻止し、その原点を見つめ
なおし、被爆者を核とする原水禁
運動の再構築と国民的統一をめざ
す」という点にあった。
一九七七年、七八年に統一世界
大会が実現し、その再構築と統一
は緒についた。原水協・原水禁と
広汎な市民団体が結集し、長崎の
証言の会もこれに参加した。
私たちの立場は明確である。会
則にあるとおり、証言の会は、「思
想や党派のちがいをこえた自主的
民主的市民運動をすすめる」。

第8回 長崎平和市民講座



この原則に立つならば、すべて
の党派、宗派の市民に開かれなが
ら、同時にそれらに隷属せず、また
他者との連帯こそ求めるが、いか
なる干渉も認めず、あくまで「自
主的民主的市民運動をすすめる」
ことに徹する以外にはない。
長崎の証言の会はこの原則に忠
実であることで、自発的な草の根
運動としての市民権を得てきた。
去る七月一日の運営委員会では
この立場を再確認しつつ、さらに
ねばりつよい、質の高い反核証言
運動を通して、核兵器完全禁止、
被爆者援護法の実現、原水禁運動
の国民的統一をめざして積極的に
活動していくことを決意したので
あった。(鎌田 定夫)

●第8回長崎平和市民講座風景

長崎の証言の会 七月運営委員会報告

七月一日、長崎県社会福祉会館
で長崎の証言の会運営委員会が開
かれ、次の報告と協議が行われた。
(一)三月以降の活動報告(事務局)
詳しい日程は別掲「事務局日誌」
の通りだが、3・1ビギンデー、
4・2福田須磨子没後10周年など
をめぐる行事や活動が中心となっ
た。その他、堀石和さんを中心と
な、中村梧郎写真展、憲法集会な
どもあり、原爆の図を見る会、原
水禁連絡会議ながさきの広場など
は実行委員会に参加して取組み中。
(二)証言「長崎通信」の編集
企画について(編集部)
(1)「証言11号」(広島担当)は「ト
マホークと反核草の根運動」の特
集。長崎より証言(山口仙二ほか)
インタビュ(宇都宮徳馬)ルポ
(島田興生)ひろば原稿3本を送
った。
(2)「証言12号」(長崎担当、10月
刊)
特集(1)私は被爆をこう語る—
草の根語り運動、(2)いまなぜ援
護法か—反核運動と援護法をめ
ぐる各層各界の動向、提言、その
他、84原水禁世界大会、ベトナム
枯葉作戦、写真とルポ(中村梧郎)
「鎮魂歌・新長崎物語」シナリオ(砂

田明) 39年目の反核証言、反核作
品集などで構成予定。
(3)「長崎通信」73号編集企画
(三)当面の証言の会活動企画と
日程・分担など
(1)第8回長崎市民平和講座(別
記の通り)(2)原爆の図展(3)原水
禁世界大会ながさきの広場(4)第
5回ナガサキ国際フォーラム(検
討中)(5)全国平和教育シンポジ
ウムへの参加(9月22・23日、東
京)
(6)国連軍縮週間参加企画
①吉田昌代さん歌の夕べ—長
崎平和推進協会記念行事の一環
として開催申入れ、検討中(10
月28日夜、平和会館)
②砂田明氏「新長崎物語」—
実行委員会団体による独自企画
として開催予定。(10月30日夜、
長崎新聞社文化ホール)
(7)夏季の図書販売のこと
(8)「原爆児童文学」(汐文社)
来年の被爆40周年にむけて原爆
児童文学集刊行の企画が汐文社に
よってすすめられている。長崎で
も刊行準備委員会(事務局・今田)
が発足し作業を開始した。全二十
巻の予定だが、うち二巻は証言の
会編によるドキュメンタリーとな
る。会では「わが子に語る長崎の
証言」の企画をたて執筆者を調整中。
原稿締切9月1日、最終稿11月中旬。

■核実験抗議の座りこみ
4月22日(ソ連) 一八五回
4月29日(ソ連) 一八六回
5月6日(米英合同) 一八七回
5月13日(フランス) 一八八回
5月20日(フランス) 一八九回
6月3日(ソ連) 一九〇回
6月17日(フランス) 一九一回
6月24日(仏・米) 一九二回
7月28日(ソ連) 一九三回
■寄贈図書
あの日おきたことを(名古屋
YMCA ひろしま・ながさきを伝
える会)中学生の春夏秋冬(石川
逸子・岩波ジュニア新書)長崎原
爆学校被災誌(原爆殉難教子と
教師の像維持委員会)武力で日本
は守れるか(前田哲男・高文研)
ナガサキ—一九四五年八月九日
(長崎総科大平和文化研究所・岩
波ジュニア新書)20冊分。栗原貞
子詩集(土曜美術社)
■カンパ御礼もうしあげます。
富山・石崎千鶴子(二百円)東
京・宮坂和子(千円)岐阜・安田
寛子(千円)大阪・本田光徳(千
円)福岡・吉松初子(一万円)柳
生じゅん子(五六〇円)長崎・青
木久枝(三百円)川崎キクエ(三
千円)第8回市民平和講座会場に
て(二万一千円)砂田明氏ほか(一

■事務局日誌 (4月〜7月)
4月18・23日 中村梧郎写真展
(市民会館、証言の会も参加)
4月25日 「証言」第10集、「長
崎通信」72号発行
4月26日 原爆の図長崎展実行委
5月6日 堀石和さんを中心と
(宝来軒、多数出席)
5月8日 原爆の図長崎展実行委
員会(山本出席)
5月9日 憲法と平和・くらしを
考える県民集会(市民会館)
5月15日 原爆の図長崎展発会式
(秋月・広瀬・山本出席)
5月22日 原爆の図長崎展実行委
(以下、6月14日、21日、28日、
7月5日と行われ山本出席)
5月22日、6月19日 灯台台建設
委員会(広瀬出席)
6月8日 中村梧郎写真展反省会
(中村出席)
7月1日 証言の会運営委(総合
福祉センター)
7月7日、8日 平和行進参加。
7月21日 第8回市民平和講座。
講演(砂田)と映画の夕べ。
7月26日 原爆の図展丸木位里
俊の夕べ(市民会館)
編集後記 「通信」独自の役割
を強めるために積極的投稿を、
「証言」へも乞ひ寄稿。(鎌田)

長崎からの新しい出発

— 原水禁運動統一の試練と可能性 —



内田 伯

(証言の会副会長)

1 再分裂の危機

いま反核・平和運動が、また困難に直面している。一九六三年、「いかなる国の核実験にも反対か否か」や部分的核実験停止条約評価の対立を契機に分裂した原水禁運動は、一九七七年に被爆問題国際シンポジウムを契機に結集した市民団体の力もあって、統一世界大会を開くことに合意した。

長崎では一年遅れて七八年に統一大会が実現し、その後、二回の国連軍縮特別総会への参加、八二年の反核運動高揚などを実現してきた。また、五八年から原水協の提唱で行われてきた国民平和行進も、昨年から原水禁世界大会準備委員会が主催することになった。ところが、総評内の対立から平和行進が大阪に入ると、「統一労働組の旗を掲げる」という声が出され、このトラブルは今年の平和行進にも持ちこまれた。

困惑した原水禁世界大会準備委

員会では、「団体旗自粛」を申しあわせたが、これへの反発も高まり、六月下旬、この準備委員会の運営委員会へ代表を出していた原水協と平和委員会は、それぞれ会合をもって、この合意を否定し、代表の解任、更迭を決定した。

ところが、七月十、十三日の世界大会準備委の運営委員会には、原水協新執行部の金子・赤松の両氏のほか旧執行部の草野・吉田の両氏が出席したため、会議は紛糾し、世界大会開催も危うくなった。だが、二十日の運営委員会では草野・吉田氏より辞任届が出ていると紹介され、分裂はようやく瀬戸際で回避された。

分裂の要因が根絶されたとはいえないが、ともかく今年の原水禁世界大会に向けての流れは、分裂から統一へと変っていった。

2 統一への道

今回の平和行進や原水禁世界大会準備委員会におけるトラブルの

要因と経過については、朝日新聞や社会新聞が、それぞれ連載レポート、毎日新聞は「サンデー・レポート」(7・22)を掲載している。

一方、原水協は『原水協通信』で、また、共産党は赤旗を通して一貫したキャンペーンをはりながら、「一九七七年の禁・協合意に基づく組織統一を棚上げしたままの共同行動は、総評・原水禁による分裂固定化につながり、原水禁の主導で反核運動を変質させるものだ」と主張している。

世界大会準備委員会の日本生協連会長の中林貞男氏は、「原水禁運動は草の根に広がり、いまや国民のものになっていく。どこか一つの団体が運動を支配しようと思ってもできない時代にきている」と語っているという。

また、日本青年団体協議会社会部長の佐々木計三氏は、「核兵器完全禁止の運動は人類の政治争点で最高のもので、人間らしく生きる人間の尊厳を守るという運動だ。戦争の具にしてはいけない。核戦争三分前であれば、自己の組織、路線を優先させてはいけない」と主張し、全国的規模での反核集会や反核コンサートが始めている。七七年の統一世界大会開催への禁・協代表の合意にあった「年内

をめどに国民的統一組織を実現する」という課題は、いまだに果たされていない。日暮れて道遠しの感さえる。いや、日はまた昇ると信ずべきかもしれない。

そもそも長崎の反核証言運動は原水禁運動分裂の下で進行する原水禁運動の再構築と国民的統一の出発当初からの悲願であった。

七三年から開始した「原爆と科学・教育・文化を考える集い」では、例年原水禁三団体への統一の呼びかけを行ない、七八年の統一世界大会にいらした長崎での運営委員会に参加してきた。

恒常的な組織統一がまだ実現しないからといって、絶望すべきではない。数多くの市民団体とともに、地元ではしばしば共同のテールブルにつき、おたがいの和解と信頼が進みつつあるのである。

七月七日、「84平和行進」は長崎の爆心地を出発した。これに参加した三十団体からなる「長崎のひろば実行委員会」は、「今こそあらゆる困難をのりこえて世界大会の成功のために努力すること」「小異を捨て大同につき、大会と原水禁運動を成功させる」ことを訴えた。こうして、長崎からの新しいスタートが始まった。

(長崎市)

被爆地長崎から訴える

原水爆禁止一九八四年世界大会を目前にひかえ、その成功を期待して、日本と世界の運動の発展を願っておられるみなさんに、被爆地長崎から心をこめて訴えます。

ヨーロッパへのパーシングIIの配備、さらに、日本を中心とする極東海域への核巡航ミサイル・トマホークの実戦配備により、世界を破壊にみちびく核戦争の危機は、秒読みの

段階にきたといつてよいでしょう。

いまこそ私たちは、人類絶滅の危機を、私たちの英知と力を合せてくい止めなければなりません。今年の世界大会はこの意味からい

はかりしれない重要な大会だといえます。私たち一人ひとりの声と連帯の行動を、そして原爆の犠牲となった数多くの人たちの思いを、世界の隅々まで届けなければなりません。

被爆者の心をこころとして、あらゆる困難をのりこえて、世界大会の成功のために努力することこそが、核爆弾による攻撃を体験した唯

1984年7月8日 毎日新聞 長崎平和行進スタート 核兵器の廃絶へ 統一訴える

一の被爆国としての責務と考えます。

ナガサキを最後の被爆地とするため、私たちは被爆者を中心に、あらゆる努力をほらう覚悟です。今日のまろろの困難な状況をふまえ、小異を捨て大同につき、大会と原水禁運動を成功させるため、一人ひとりの良心にかけて奮闘していただくことを心の底から訴えます。

七月七日平和行進出発にあたって

原水爆禁止一九八四年
長崎のひろば実行委員会

高校の修学旅行団への期待

長崎南高校 広瀬 方人

長崎に修学旅行にこられる全国各地の高校生に長崎原爆についてお話しする機会が、この三、四年急速にふえた。出発前、数カ月を綿密な事前学習して長崎入りする学校もあれば、旅館に到着した夜だけ、被爆体験について30分程度の話をしている、ということもままされる学校もある。

修学旅行を平和学習の一貫として、事前指導、現地指導、事後指導とこまかい計画の下に行なわれる学校の実践については、『ヒロシマ・ナガサキの証言』第12号に紹介されるはずであるが、私たちとはえ事前指導が十分に行われなかったとしても、とにかく修学旅行の目的地として長崎を選び、その計画の中に被爆体験を聞かせる時間を設けられた学校の先生方には、感謝の気持ち一杯である。

私たちがお話し行つて一ばん心がいたむのは、広場へ集められた生徒にむかつて、「静かにしろ」「お客さまに失礼ではないか」「などと先生方がどなられる声を聞くときである。



私たちに對する気づかいであろうが、時には廊下に出されたり頭をなぐられたりするのを見ることもある。たのしい修学旅行を期待してきたのに、重くするしい被爆体験を聞くのはごめんだという生徒さんの気持ちもわかるからである。

むしろ、事前指導で、生徒たちの聞きたいという期待感をつくりあげることに先にやらなければならないと思われ、それに、一部の被爆体験を話している、私たちの被爆体験を話している、ほとんどの生徒さんが耳を傾けてくれることを私たちは確信している。私たちは決して話し方は上手ではないかもしれないが、体験の事実の重みは生徒さんの心にひびくという確信がある。

かなりの強行スケジュールで、疲れはて、眠っている生徒さんも大分いると思われた学校でも、あとで送ってもらった感想文に、私たちが聞いてもらいたいというところを、ちゃんと聞いてくれていた生徒さんの姿を発見するからである。どうか、旅館では生徒さんをごどならないようにお願いしたいと思う。

下平さんに聞きたかったこと

大阪・松原三中 今村 佳子

お元気ですか？ 私は6月27日に「被爆体験」を聞かせてもらった松原第三中学校の生徒です。あの時は、つらい話を聞かせてもらって、本当にありがとうございました。

私たちも無事、修学旅行から帰ってきました。体の調子が悪いと言われていましたが、今はどうなんでしょうか。心配しています。

下平さんのお話の中で、黒いになった家族のことや、おじさんの話など、とても印象に残っています。「原爆で死んだ方の方がよかった」と思ってしまった理由をきき、「今の子は幸せや」と強く言ってもらった意味がわかりました。でも、死ななかつたから私たちがお話を聞かせてくれる事が出来たのです。本当に聞かせていたただけ感謝しています。

でも、今の私が幸せでしょうか。今の社会が平和でしょうか。私は聞きなかつたです。下平さんは、「今の社会が平和だ」と思つてらっしゃるのか、核のおそろしさを知らず、戦争にも無関心で、「か

江平中の子らもがんばれ

大阪・松原三中 富永 有治

下平さん、27日はお話をいろいろ聞かせていただき、ありがとうございました。ぼくたちは最初、平和公園で慰霊祭をやりました。みんな、練習のときよりうまくいきました。ぼくはこの土の下で原爆をうけ死んでいった人たちのために、これから戦争をおこしてはいけなないと思ひました。

次に、江平中と交流会をやりました。交流会は成功でした。ぼ

修学旅行生に語る

長崎の心

長崎市立式見小学校 今田 斐男

ミッドウェー海戦で戦死した兄の無念を晴らすと陸軍航空兵を志願し、爆撃機の搭乗員として訓練中、敗戦。復員途中で父の郷里広島に寄り、祖母から父が長崎原爆で死んだことを知らされたが、涙は出なかった。

長崎駅に降りて目にしたのは、見渡す限り山の頂きまで焼け爛れ荒涼とした廃墟の跡であった。勝山小学校近くにあった家は半壊し母はそこにいなかった。

八月九日朝、警防団員として防空監視についた父は、警報解除で駒場町付近の植家へ銃器に出かけたまま帰宅しなかった。炸裂した原子爆弾の熱で父の体は真赤に焼け、その灰は爆風で粉々に吹き飛んだと思われ。

被爆体験のない私は、被爆者の許しを得てその被爆のようすと生き方を紹介している。

谷口俊雄さんは十六才で電報配



修学旅行生に語りつけて十一年

東長崎中学校 末永 浩

長崎への修学旅行生に原爆の話をした回数調べてみると、次のようになった。

一九七四年（昭和四九）は一回、七五年は三回、七六年は五回、七七年は四回、七八年は十回、七九年は十一回、八〇年は十二回、八一年は十三回、八二年は十六回、八三年は二六回、八四年は六月末まで二十回、合計一一二回。

年々ふえているのがわかるし、特に八三年の伸びが大きい。私は中学生が主だが、小学生や高校生にも話す。沖縄を含む九州の学校がほとんどで、中学校は沖縄・鹿児島・宮崎・熊本、小学校は熊本と福岡。九州外からは徳島・広島・鳥取・兵庫・大阪・京都・滋賀、それに東京である。最近、近畿地方の中学校がふえている。一度話をすると、次の年も続けられる学校が多い。

話を聞いた生徒たちの反応などは、その場の雰囲気や質問、あとで送つて下さる修学旅行文集や手紙でわかる。手紙は先生がまとめて送つて下さる場合もあり、生徒



個人からくることもある。また、修学旅行のしおり、折鶴、寄せ書きの色紙をいただくこともある。

次はある中学生の手紙の一部。

「先生、お元気ですか。私は五月八日に先生に原爆について話をしていたいた大阪府吉川中学校の生徒です。小学校六年生のときも、広島でこのような話を聞きました。が、先生の話の方がよくわかりました。五月九日に資料館に行き、いろいろなものを見てきました。ちゃんと先生がおっしゃったように、目をそむけないようにしました。生々しくて気分が悪かつたですが、本当にあのようになつた人がいたんだと思つて見ました。……」

滋賀県安土中学校の生徒たちからは、寄せ書きの色紙をもらった。「戦争をにくみ、自分たちの手で平和を築いていくことは、自分たちの真実の願いです」（三年一組）、「戦争なんていやだ」（三年二組）、「ノーマス長崎」（三年三組）、「世界に平和を」（三年四組）、「世界が平和でありますように」（三年五組）。それらの学級のことばをかこんで、みんながひとことずつ心のこもる寄せ書きをしていた。

昔はむかし

先日のこと、「市民生協」機関紙の編集委員の婦人方三人が来訪された。市民生協活動と平和運動のつながりについて特集を組む、ということでのインタビュー記事作成の仕事なのであった。

ぼくはそれに及ばずながらも応じたのであったが、種々のむづかしい問題の応答の前後に、「戦争はあると思いますか？」との意表をついた質問が用意されていたのである。

絶句したまうろうろとあれこれ考えた後、ぼくは「戦争はないでしょう」と一応は断言したのである。だが、確かに核戦争の脅威は日夜報道され続けている。日く、「核戦争は杞憂が杞憂といつて笑っておられない程に現在には確実に立ち至っている。」「軍事バランスによつて平和を求めようとすることは、拡大してバランスをとる限り危険は増すばかりであろう。」「または「我々は地球という大きな火薬庫のなかで生活をしているのだということを忘れてはならない。」「などと、さまざまに危険が予測されている。日常にお

山田 かん



いて、市民生協もその危険度について、ある種の脅えのなかに暮しているのも事実である。

だが、ぼくがあの答えをする時に、うろろうと考へこんでいたなにかは、一九五〇年代（昭和二十年）から三十年代（昭和二十年）の反原爆運動の揺籃期のことかと思ひうかんのであった。

当時アメリカ占領軍の軍政下であり、原爆投下当国が原爆反対を表明する運動をきびしく監視、弾圧することは当然の国家政策であり、それは即、反米親ソの行動として圧殺されつづけていた。当然に、現在に引き継がれるぐらいに新鮮さを失っている「反核」「反原爆」という造語もまだ出来ていなかった。そのような時代の場合、心ある人々はおらず「平和運動」とかいう言葉で表現しているに過ぎなかったのであつた。

一九五四年（昭和二十九）三月一日、マーシャル群島ビキニ環礁でのアメリカ水爆実験により第五種脂肪が被爆することによって、よ



くたちは被爆二世の子から話をききました。江平中に被爆二世の子がたぐさんいると知りました。

でも、江中は運動がすすんでいないそうです。それはやっぱり解放教育や平和教育が弾圧されているからです。被爆地ナガサキなのに、江中の子ら、もつと勉強していかねばいけないと思ひます。

次に資料館にいきました。目をそむけたくなるほどすごい写真があり、その中でぼくがいまでもはつきりおぼえているのは兄弟の写真で、兄が弟をせおつて親をさがしている写真でした。この写真をみて、あらたに落りがこみあげてきました。

ぼくたちは被爆者の気持ちや思い、体の痛み心の痛みはわかりませんが、この修学旅行で少しでもその思いや痛みを近づけることができませんでした。修学旅行でいろいろ学びました。聞きとりで、復元運動のこと、その他いろいろのことを教えていただき、ほんとにありがとうございました。

私達もがんばります

長崎・江平中 梶原ナナミ

下平作江さんの話を聞く前にも原爆の話や体験談は聞いていたが、このようなむづい、つらく悲しい体験談は初めてでした。その中で心に強くきつてきたことを二つを書きます。

原爆が落ちた二、三日後、下平さんとお母さんを見つけた時、そのお母さんはまるこげになっていました。「おかあちゃん」って言うて抱きついた時、お母さんの体はバラバラになって落ちました。私はそれを聞いた時、一しゅん息が止まりそうになりました。最近まで元気で働いていた体がまっくろこげになり、その体がつみきのようになつていくのです。その時の下平さんの気持ちを思うと私は胸がつまりそうでした。

もう一つ、悲しい話を聞きました。それは、下平さんの妹が鉄道自殺をしたことでした。この妹の人は腸がおかしく、もう腸だと思ひ手術をしたのですが、そのきず口からしるがでて、へんなにおいがしてききました。そのせいか妹の友達が一一人減つていき、最後



には一人もいなくなつたのです。私は、妹さんは差別に負けて自殺をえらんだと思ひました。その死体は、原子ばくだんが落ちた時のようにむごかつたらしいのです。耳や手や足がバラバラになつて、肉などが飛びちつていたそうです。私はまたおどろきました。と同時に、戦争への怒りを感じました。たつた一発のばくだんで、何万人の人間が死んでいくのです。その中には、下平さんと同じ家族や友達や、となり近所のおばさんやおじさんなどが死んでいくのです。一人一人の希望やゆめなどをみんなぶちこわし、人間を不幸にしたのです。私はこんなむづい、つらい戦争はせつたいに許しません。

戦争は最大の差別なのです。これからの世界を作りだすのは私達です。だから、私達みんなが、まっくろこげにならずに生きていく、戦争のことについてよくよくわきまをもち、戦争への道には二度と渡らせてはならないと思ひます。

下平さん、私達も二度と戦争がおこらぬよう、せいといっぱいがんばりますので、下平さんも体に気をつけてがんばつて下さい。

内科・胃腸科 (入院諾)

上戸内科病院

長崎市城栄町 30-2 (城山八幡神社前)

電話 (0958) 44-7191 (代)

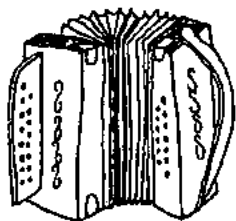
内科・循環器科・胃腸科 (入院諾)

哲翁内科

長崎市浜口町 18-9 (大学病院下)

電話 (0958) 46-5568 (代)

●正確・鮮明な仕上り——伝統と開拓精神の結合



正文社

(〒850) 長崎市魚の町6-6 (長崎市公会堂前)

電話 (0958) 26-0211 (代)

「ナガサキ」出版記念会から

小さくて大きな本

長崎市 秋月辰一郎

長崎総科大学の会議室で行われた「ナガサキ」一九四五年八月九日（長崎総科大平和文化研究所編、岩波ジュニア新書）の出版祝賀会に出席した。具島所長のもと二十数名のスタッフの共同執筆である。

新書版という小さな本であるが平和研究所で、長崎という被爆地で、原爆・核そして平和を考え書きつづけた人々の今までの業績を集大成し、またそれを極めて小さく凝縮したものである。しかし、よくこれまでにまとめ凝縮されたものと感心した。

記念祝賀会の会場から小さな網場の町、網場の港を眺めた。小さな街の小さな港の風景である。ここは日本の西の端の極めて小さな街である。大学も小さい大学である。梅雨の末期で、雨雲が低くたれこめていた。陰うつな重苦しい日であった。

今、祝賀会が開かれている。そしてそこに集っている人々の力との対比を考えた。

核兵器の量は余りに大きい。それに比べ、網場の街の大学の研究所は小さいもののようにである。

ところが、その会に集った人々、具島先生を初め執筆者の発言を聞いていて、平和を願う探求する人々の精神に打たれ始めた。人間の精神の強さ、大きさを私は改めて再確認したのである。

よく「匹夫の志」という。ある

いは「ペンには剣より強し」という古い言葉もある。ここに集まった平和探求者の精神の強さを、この小さい本が物語っている。そう思いつつ、先生方を眺めていた。

「恥を決する」という言葉のあてはまる顔、あるいは半生を平和を求めて苦悩した人の顔、被爆した自らの苦しみを全被爆者の苦しみにかえて背負うた顔、そういう人々が次第に大きく大きく見えてきた。

は、小さな街の片隅の部屋から始まったであろう。この平和研究所は世界の核勢力という大きな力に力強く挑戦していくであろう。

この「ナガサキ」一九四五年八月九日、も、やがて実際に大きな本に書きかえられると思う。そう願う。

明けぬ夜はないが、また晴れない梅雨もない。そう思いつつ、梅雨雲の低くこめていく網場の淋しい港を見ていたのである。

原爆の悲惨、無念を今こそ

長崎市

田吉 チエ

原爆を受けた実相を風化させてはならないと、最近しみじみと考えています。

お世話になつてゐる医師も看護婦の方々も、あの頃はまだ生まれていなかったと言われます。そして自分の孫たちも、話は聞いていても実感のない人たちのみになった、これでよいのか。私たちが死んだら、この惨酷な実相を継承していくためにどうしたらよいのか。

原爆で死んだ人々の無念さを、あわれを忘れてはいけません。世界の平和を守るために、子孫を守るために、私たちは今真剣に

考えねばならぬ時なのだが……。

(長崎市)

初めて「折鶴の塔」の前に

島原市

林田 貞

六月十日（日）、「中学校にもつと英語の時間を」長崎県民の会が開かれた。かねて主催者の中の新英研の会員でもあるという経緯もあったので、早朝からわが家を出て、長崎市に赴いた。幸いにも特急バスは遅延することなくバスターミナルに着いた。

ふと思いついたのは、会場と同じ方向の、平和公園を訪れてみよう、ということであった。

何年ぶりであつたらうか。折鶴の塔には初めてお目にかかった。TVでも放映されたように、滋賀県草津市立の中学三年の一組や四組の名札が、多数の、平和を希求する折鶴の中に下げられていた。ここにも、子供たちはどの国の子でも、まず平和を願っているのだ、と改めて知らされた。

カメラに収めようとした頃、中国の方と思うアベックが、折鶴についてしばし会話をしていた。私は、八・九に中曽根さんがやつて来るとかだけど、うわべの言葉は別にして、草津の中学生たち

「長崎の証言の会」兵庫県支部懇談会開く

の純情を、真実どう受けとめるのであろうか、と思つた。それでも防衛費のいやが上の増大は、やむをえない、と豪語するのであるのか、と。いま書いていて思いついたこと、それは前防衛庁長官が、招かれざる客であるにもかかわらず、広島まで出向き、その後の総選挙であえなく落選の憂き目を見たことだ。

今の栗原長官、それでも何か羽振りを見せに、ナガサキにやつて

来るのかどうか。佐世保がトマホークのことで、やや騒がしくなっているの、そのこともあつて、またも招かれざる客となるのか、とも思つてみた。

(島原市)

84夏の行事 ミニガイド

84原水爆禁止世界大会

8月1〜3日 国際会議（東京）

閉会後東京ラリ

5日 関連行事・資料館見学、折り鶴平和行進

6日 世界大会・広島（18〜20時）

9日 長崎のひろば（13〜15時）

第14回戦災空襲を記録する全国連

られていない。被爆者も高齢化して、被爆者援護法の制定がますます必要となつていっているのにその見通しは暗い。その面からの取り組みも必要である。証言の会も広島と呼応して将来統一した会として運動を展開させてほしい。などが話されました。

短い時間でしたが、まず県内一〇〇人の購読者・会員をめざして身近なところから活動していくことを確認して散会しました。全国いろんなところで地道に証言運動の基盤をつくる活動が広まることを期待しています。（文責・川崎）

（世話人）岸 正晨、石原佐記男、木村良夫、川崎結平（連絡先）〒651-13 神戸市北区

絡会議員大会

8月4〜9日 84平和を築く文化のひろば（文化展、講演会、交流会、映画会、戦跡・基地めぐりなど）

ながさき8月9日展（第5回）8月4〜9日 県立美術館小崎侃本版画新作展II松尾あつゆき「原爆句抄」を彫る

8月5〜11日（長崎市元船町現代画廊で10〜19時）長崎国際平和コンサート（第2回）8月5日 市公会堂（13〜20時）

平和祈念式典（長崎市）8月9日 平和祈念像まえ（10時）ナガサキ国際フォーラム（第5回）8月10日 13時より不戦の集い（爆心公園不戦の碑前）15時より交流集会（平和会館）

長崎県民間教育サークル連絡協議会・84年合宿研究会集

8月18〜19日（島原市・堀沢敏雄氏講演と平和教育分科会）全国平和教育シンポジウム9月22・23日 東京、正則高校

NHKラジオ放送「福田須磨子著 われなお生きてあり」5回連続（8月1、10、17、24、31日、いずれも午後9時より、翌日午後3時10分より再放送。作家の郷静子さんが解説を担当。）

長崎・反核平和日誌

(4~7月)

(事務局日誌と核実験抗議座りこみは別にまとめて掲載した)

4月14日 長崎平和推進協会の理事会が開かれた。

4月19日 『原爆に姉を奪われて』(大村・清松ツタ子著)が自費出版された。

5月1日 長崎市原子爆弾被災資料協議会が初会合を開き、被災資料の収集・保存・展示方法などについて検討。

5月4日 「原爆の日を休日」と首相に直訴する出発式が爆心地前で行われた。直訴するのは平山チカさんら六名。

5月5日 国連大学が「核時代の平和を求めて」を発行。長崎の被爆者の主張も収録されている。

5月7日 堀石和全米被爆者協会副会長が市長を訪問、「ザ・デ・イ・アフター」の続編を日米共同で作成するよう提案。また、日本から医師団を派遣するよう要請した。

5月11日 米平和運動家ラリー・ダナムさんが来崎。

5月13日 反トマホークを訴えるキャラバン隊が佐世保を出発し、横須賀へ向かった。

5月17日 姫朋飛中国国務委員が来崎し、平和記念像に献花。

5月23日 長崎市は北海道知事、札幌市長へ、8月9日11時2分に時計台の鐘を鳴らしてもらうよう要請することにした。

5月26日 長崎市は、米・フィラデルフィア市との非核都市連帯をよびかけていたが、断りの手紙が届いた。

5月31日 長崎市は全国都道府県市に「原爆死没者の慰霊と平和記念の黙とう」を呼びかけた。

5月31日 長崎の被爆直後の写真が見つかった。

6月1日 スエーデンの作家アン・マルゲリット女史が市長を訪問。スエーデンでロングランの原爆展を計画していることを明らかにした。

6月2日 自治労はトマホーク配備反対全国連鎖集会のキャラバン隊を佐世保から出発させた。

6月3日 長崎で原爆後障害研究会が開かれた。

6月13日 長崎平和推進協会が図書・資料室設置準備委員会を発足させた。

6月14日 英ヨークシャーテレビ局のクリス・ブライヤー氏が来崎。市長に原爆番組制作への協力を依頼。

6月14日 東独の原爆展で、五会

場二十一万人が参観。

6月16日 原爆問題研究普及協議会の総会が開かれた。

6月16日 岡山県牛窓中学校が平和公園で「平和のつどい」開催。

6月19日 佐世保市の母親たちが反トマホークのミニ集会・勉強会を開いた。

6月19日 大阪府の深井中学校が平和会館で平和集会を開いた。

6月20日 大阪府松原第四中学校と長崎市西浦上中学校が平和交流会を持った。

6月20日 『ナガサキ1945年8月9日』(長崎総合科学大学平和文化研究所編、岩波ジュニア新書)が発刊された。

6月22日 ポルトガル首相が平和公園で平和宣言を読みあげた。

6月23日 長崎、佐世保で反トマホーク集会が開かれた。

6月26日 ソ連参戦軍人委員三人が原爆資料館を見学した。

6月28日 長崎と広島の実相をアメリカ国民に伝えるために四人の記者を招くことがきまつた。

6月28日 原爆読本初級用「雲になつて消えた」が紙芝居として荒木書店から発行。

6月29日 恵の丘長崎原爆ホーム『原爆体験記第二集』を発行。

6月29日 佐世保市長が非核三原



則堅持を政府に申し入れることを市議会で言明。

7月2日 南高来郡有家町が「非核平和宣言」を町議会で議決。

7月4日 長崎市教育委員会が被爆写真の新しいパネル作りに取りかかった。

7月5日 『全面核戦争と広島・長崎』(具島兼三郎著・岩波ブックレット)発行。

7月7日 アジアウィークカメラマン(香港)が「恵の丘ホーム」録画を始めた。

7月7・8日 原水爆禁止世界大会平和大行進が統一して行われた。(第二回)

7月11日 イタリア空軍士官学校の士官候補生ら百二十四人が来崎、映画「原爆の長崎」、原爆資料館を見学、平和祈念像に献花した。

7月12日 長大医学部原爆後障害医療研究施設が大気中のプルトニウム線量測定を始めた。

7月23日 朝日新聞 原爆一人芝居長崎で上演へ 反戦・反公害交流を目指し 水俣病告発の砂田さん

第8回市民平和講座

原爆と水俣・沖繩

—講演と映画の夕べ—

7月21日(土)夜、長崎県勤労福祉会館で長崎の証言の会主催の第8回長崎市民平和講座が開かれ、50余名の出席者がありました。

まず、映画『核トマホーク』(翼プロ)が長崎市従組青年部の協力で上演され、一同改めて核戦争の危機を痛感し、反核の決意を固めました。

つづいて秋月会長の挨拶、鎌田副会長の講師紹介が行なわれ、砂田明さんが演壇に立ちました。

砂田さんは、一人芝居「鎮魂歌・新長崎物語」の構想とその一部を紹介しながら語りと歌をまじえて熱演しました。

とくに山田かんの詩「帰る来よと」の朗読、「原爆絵巻・崎陽のあらし」の語りは圧巻でした。

また、原民喜の詩「自分のために生きるな、死んだ人たちの歎きのためにだけ生きよ」というリフレインを軸としたマンドリン伴奏による詠唱は、参加者の唱和をよびおこしました。「マダム・バタフライ」

や「じゃがたらお春」を歌いこみながら、長崎の死者たちの嘆きを歴史と空間に広げ、広島・水俣・沖繩・ベラウへとつなげていく構想も共感をよびました。

最後に、広島・長崎・沖繩・水俣・ベラウをつなぐ「海の母子像」建立運動も提唱されました。

司会は浜崎均さん、閉会は広瀬事務局長。会場カンパ約二万円は砂田さん、市従組青年部、平和銀輪隊に差上げました。(事務局)

4月26日 長崎新聞
ヒロシマ・ナガサキの
証言第10号
渡辺千恵子さんの訴えなど

●10月30日長崎で公演企画

国連軍縮週間参加、長崎新聞社文化ホールで「鎮魂歌・新長崎物語」公演の計画がすすんでいます。